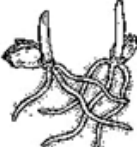
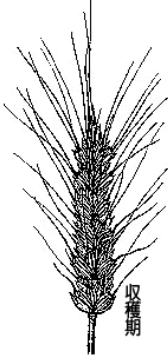




東北地域における 麦をめぐる事情

令和8年8月
東北農政局生産部生産振興課

1 小麦の生育ステージと主要作業（北東北・ゆきちからの例）

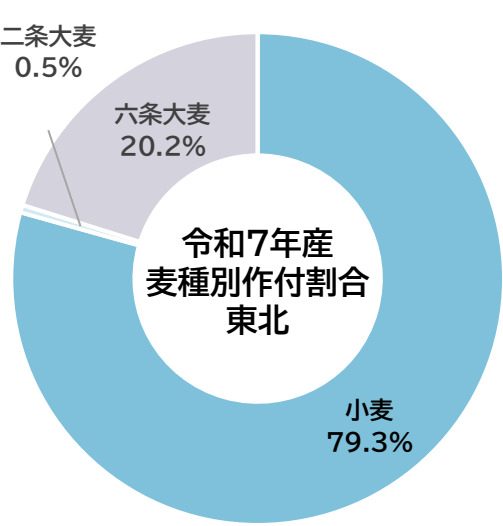
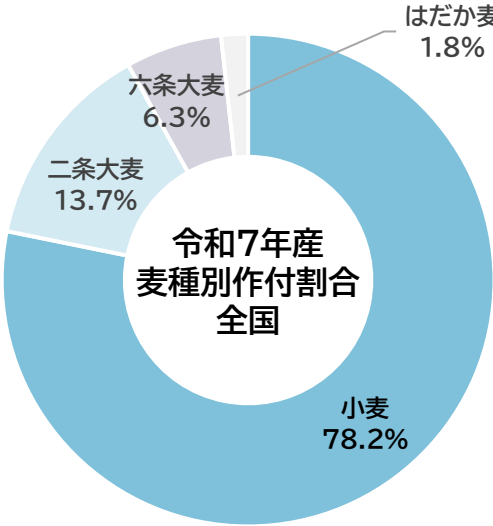
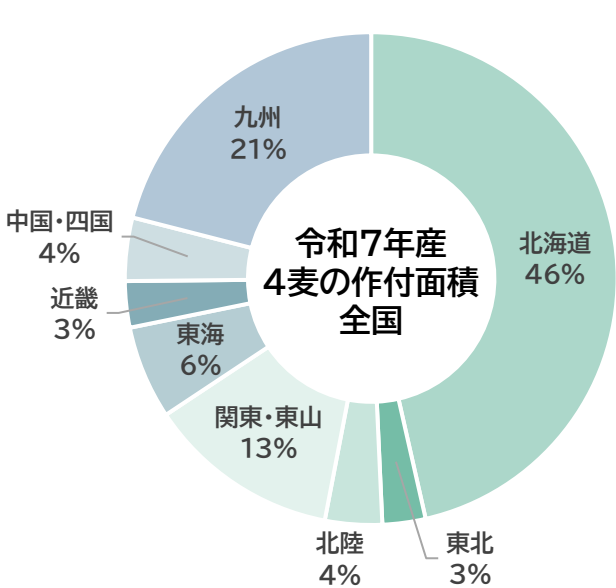
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月							
小麦の生育ステージ	 発芽期   分けつ期  幼穂形成期のコムギの幼穂  出穂期   開花期  収穫期																	
	播種期		出芽期 (5葉～6葉まで生育)		越冬期			幼穂形成期・ 減数分裂期		出穂期・ 開花期		登熟期	収穫期					
	<table><tr><th colspan="4">登熟期</th></tr><tr><td>乳熟期</td><td>糊熟期</td><td>黄熟期</td><td>完熟期</td></tr></table>											登熟期				乳熟期	糊熟期	黄熟期
登熟期																		
乳熟期	糊熟期	黄熟期	完熟期															
主要作業	種子消毒 施肥・播種 除草剤散布 排水溝設置 雪腐病防除 踏圧  融雪水排水 融雪期追肥 踏圧 病害防除 出穂期追肥 収穫 																	

注：主要作業については、農研機構「麦栽培マニュアル」ゆきちからから引用。追肥の回数等の作業体系は地域によって異なる場合がある。

2-1 全国及び東北の作付面積(令和7年産)

- 全国の令和7年産4麦の作付面積は、小麦229.6千ha(作付割合:78.2%)、二条大麦40.3千ha(13.7%)、六条大麦18.6千ha(6.3%)、はだか麦5.2千ha(1.8%)であった。
- 東北地域の令和7年産4麦の作付面積は8.2千haで全国に占める割合は3%程度である。東北における主な麦種の令和7年産作付面積は、小麦6,530ha(79.3%)、六条大麦1,660ha(20.2%)であった。

	4麦計 (ha)	小麦 (ha)	二条大麦 (ha)	六条大麦 (ha)	はだか麦 (ha)
全国	293,660	229,600	40,300	18,600	5,160
東北 (全国に占める割合)	8,231 (3%)	6,530 (3%)	41 (0.1%)	1,660 (9%)	0 (0%)

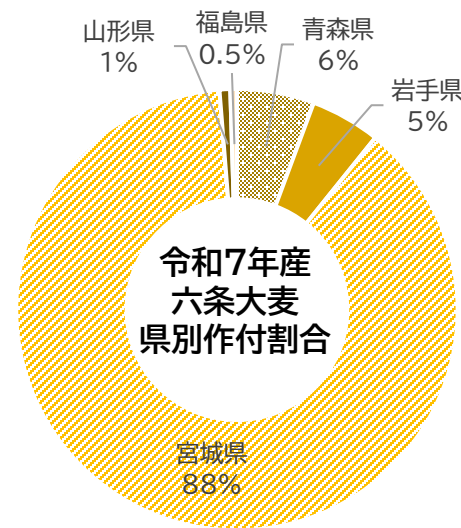
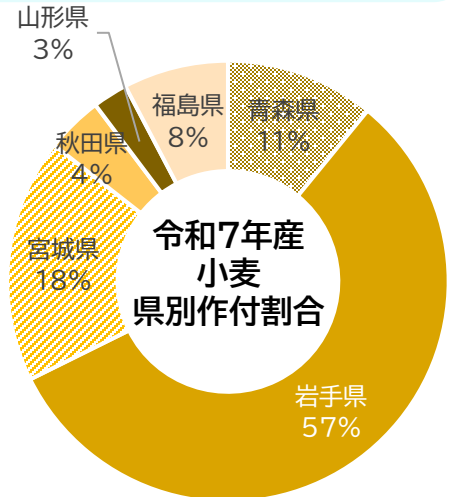


2-2 東北各県の麦種別作付面積及び収穫量

- 東北地域の麦の作付けは、小麦と六条大麦が大半を占め、作付けが多いのは岩手県(3,800ha)、宮城県(2,645ha)である。
- 小麦の作付面積は、岩手県が約6割、宮城県が約2割、青森県が約1割を占め、六条大麦は宮城県が約9割を占める。

東北各県の麦作付面積及び収穫量(令和7年産)

	4麦計		小麦		六条大麦	
	作付面積 (ha)	収穫量 (t)	作付面積 (ha)	収穫量 (t)	作付面積 (ha)	収穫量 (t)
青森県	807	2,204	713	1,870	94	334
岩手県	3,800	9,411	3,710	9,200	85	199
宮城県	2,645	10,278	1,170	5,220	1,460	4,990
秋田県	272	911	272	911	-	-
山形県	181	390	167	362	13	27
福島県	531	1,329	503	1,270	8	16
東北	8,236	24,523	6,530	18,800	1,660	5,570

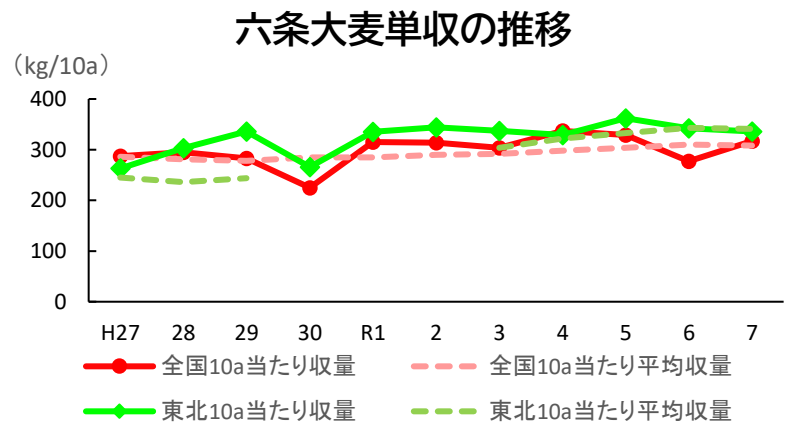
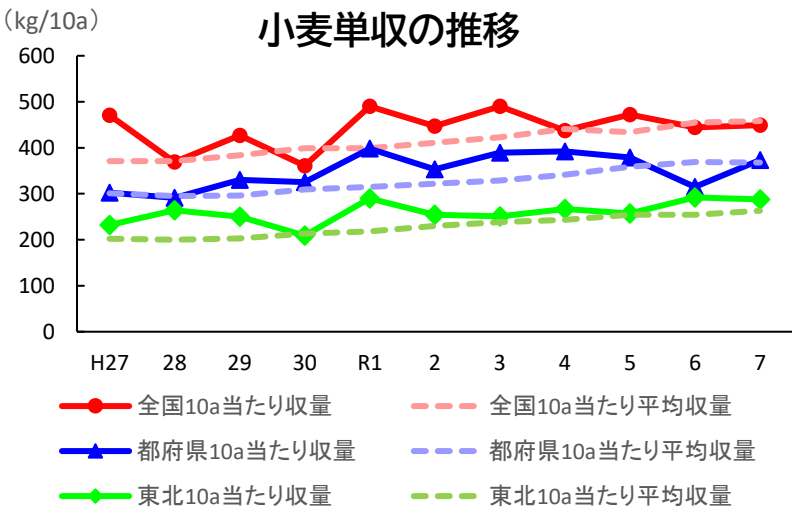
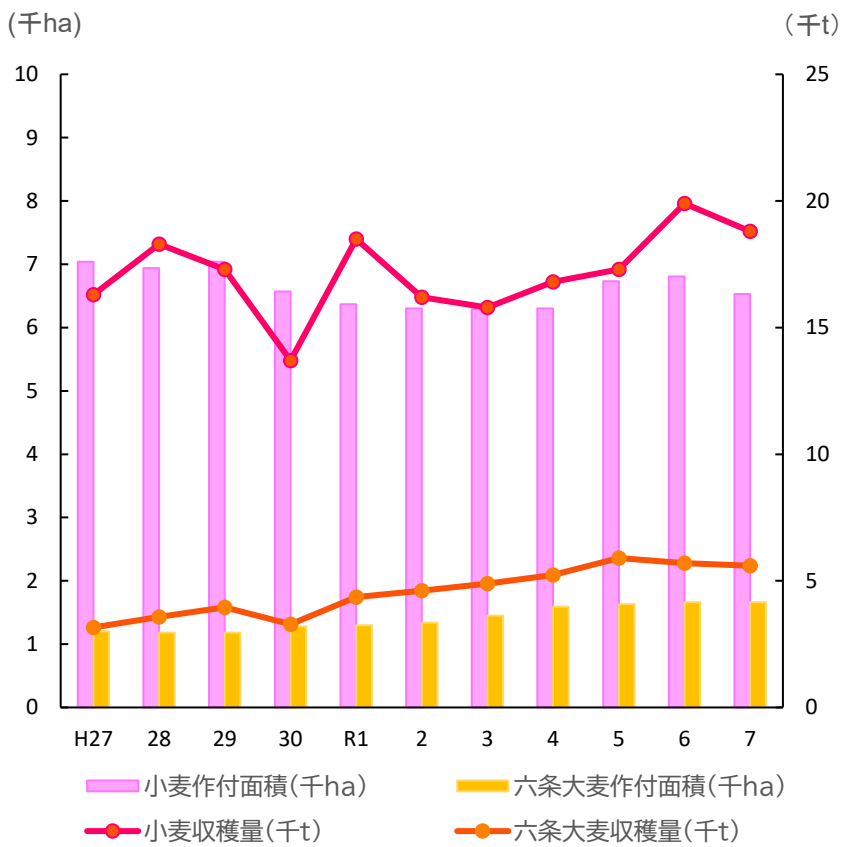


資料：作付面積は東北農政局生産振興課調べ、収穫量は農林水産省「作物統計」
注1：表中の「-」は事実のないもの
注2：東北地域での作付けの大半を占める小麦及び六条大麦を掲載

2-3 東北麦(小麦・六条大麦)の作付面積、収穫量、単収の推移

- 東北麦の作付面積は、小麦はこれまで概ね横ばい、六条大麦はこれまで増加傾向で推移している。収穫量は小麦で年次ごとの変動があるものの微増しており、また、六条大麦で増加傾向である。
- 東北の小麦の単収は、全国平均と比較して低く、都府県平均と比較しても低い状況で推移している。
- 東北の六条大麦の単収は、平成28年以降、全国平均を上回った状態で推移している。

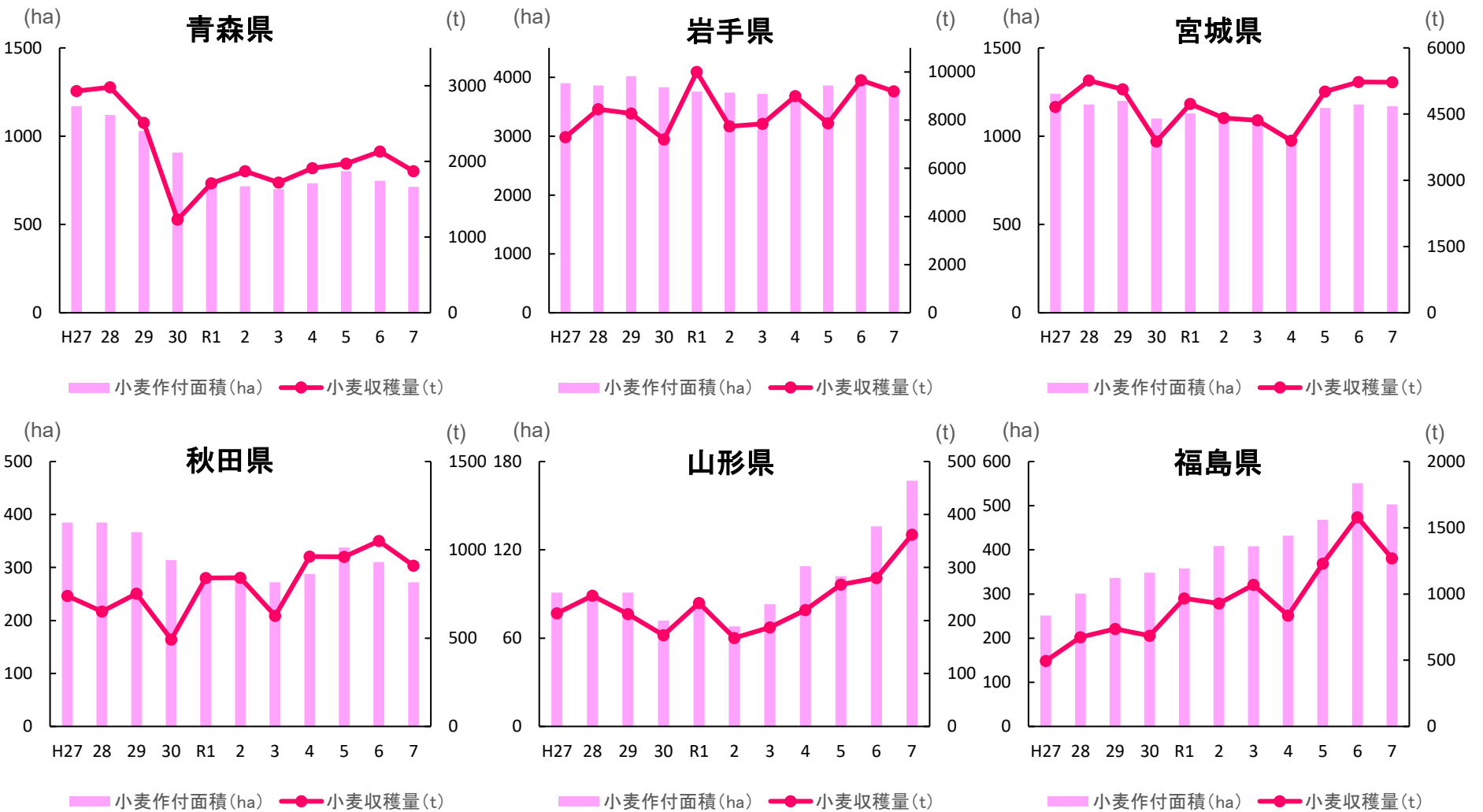
東北地域の小麦・六条大麦の作付面積及び収穫量の推移



資料：農林水産省「作物統計」
注1：「平均収量」は直近7箇年のうち最高及び最低を除いた5箇年の平均値
注2：H30からR2の東北の六条大麦の10a当たり平均収量は事実不詳又は調査を欠くもので非公表

2-4 東北各県の小麦の作付面積及び収穫量

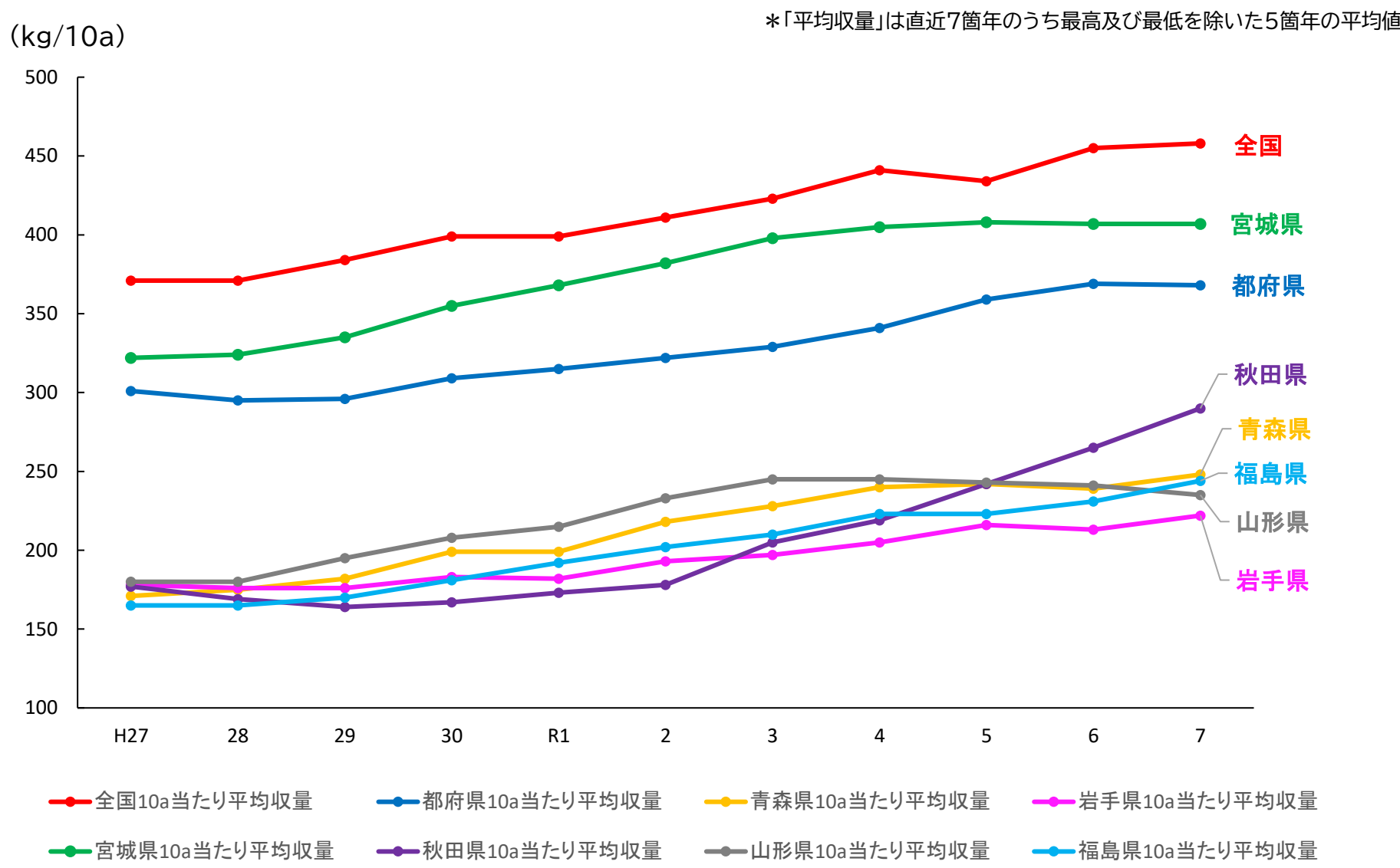
○ 東北各県の小麦の作付面積は、岩手県及び宮城県が概ね横ばいで推移。青森県、秋田県及び山形県では令和元年まで減少傾向であったが、それ以降は青森県及び秋田県では概ね横ばい、山形県は増加傾向で推移。福島県では平成27年以降増加傾向で推移している。



資料：農林水産省「作物統計」

2-5 東北各県の小麦の10a当たり平均収量の推移

- 小麦の10a当たり平均収量については、宮城県で都府県平均より高い傾向で推移している。
- その他の県では都府県平均を下回った状態で推移しているものの、近年、秋田県で平均収量の伸びが著しい。

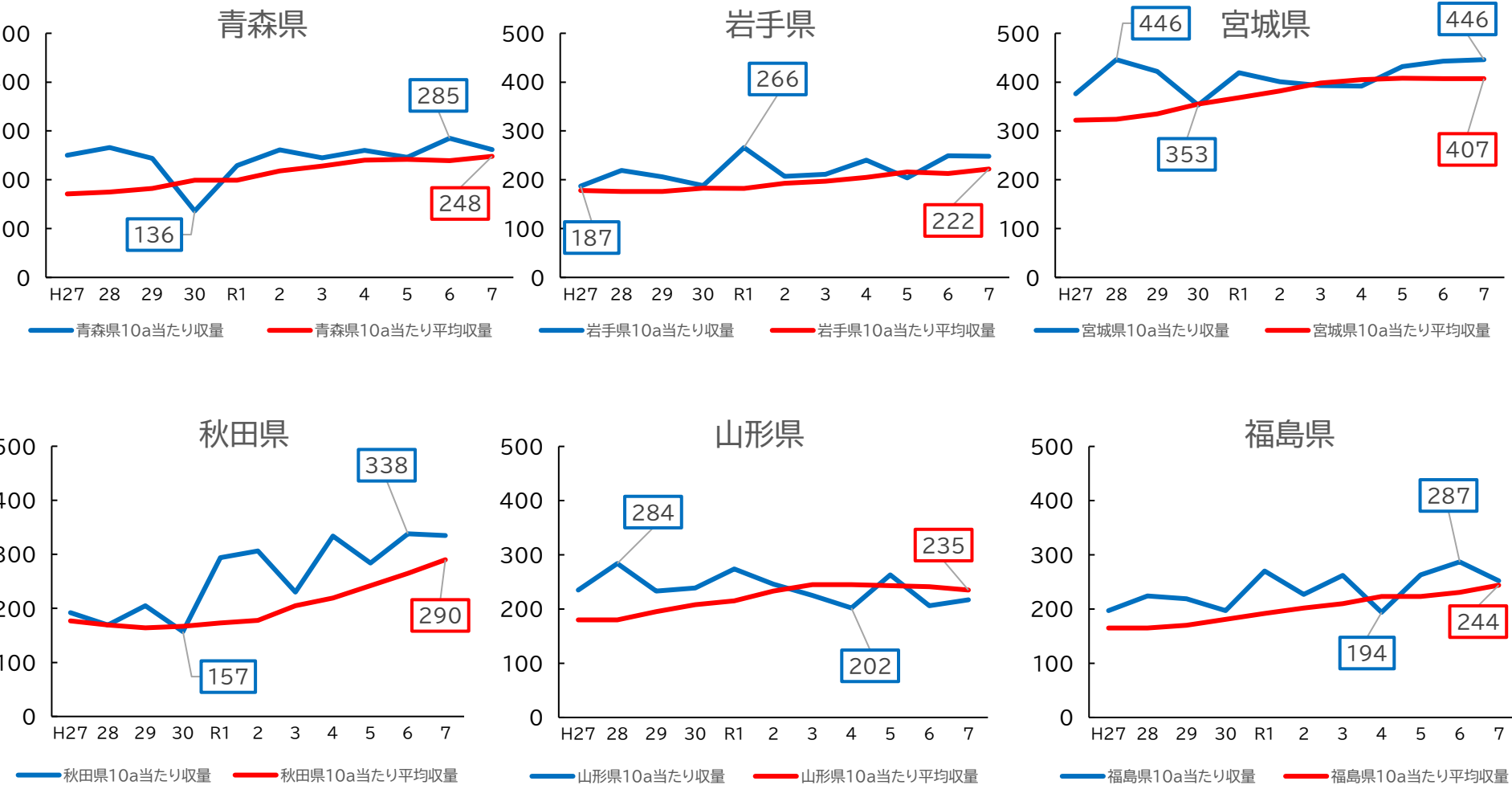


資料：農林水産省「作物統計」

2-6 東北各県の小麦の10a当たり平均収量と10a当たり収量の推移

- 小麦の10a当たり平均収量は、宮城県は300～400kg前後と高い傾向で推移しており、秋田県及び福島県は増加傾向で推移している。
- 10a当たり収量は各県・年次ごとの変動が大きい。

※「平均収量」は直近7箇年のうち最高及び最低を除いた5箇年の平均値



資料：農林水産省「作物統計」
注：囲み数字はR7年産10a当たり平均収量（赤）及び各県の10a当たり収量の最高・最低値（青）

2-7 小麦の単収ランキングー全国の上位と東北各県ー

- 全国的にみると、北海道と愛知県の単収が高い状況にある。
- 東北地域においては近年、宮城県の単収が安定して高く、次いで秋田県という状況が続いている。他4県については単収の順位変動もあるが、時に全国の中でも順位が低い年もある。

R7年産		
順位	都道府県	単収 (kg/10a)
1	愛知	579
2	北海道	504
3	宮城	446
16	秋田	335
31	青森	262
32	福島	252
34	岩手	248
38	山形	217
全国		449
都府県		373
東北		288

R6年産		
順位	都道府県	単収 (kg/10a)
1	北海道	541
2	愛知	473
3	宮城	443
9	秋田	338
19	福島	287
21	青森	285
29	岩手	249
35	山形	206
全国		444
都府県		315
東北		292

R5年産		
順位	都道府県	単収 (kg/10a)
1	愛知	575
2	北海道	542
3	愛媛	464
4	宮城	432
28	秋田	284
31	福島	263
32	山形	263
34	青森	246
38	岩手	204
全国		472
都府県		379
東北		257

資料：農林水産省「作物統計」

3 東北地域の麦の水田での作付割合と排水対策の実施状況

- 東北地域における麦の栽培は、水田における転作作物としての作付けが大部分である（麦作付面積の約9割）。
- 麦は湿害に弱いことから、特に水田での作付けでは排水対策が重要であり、明渠の整備率は高い県が多いものの、心土破碎や弾丸暗渠等の実施率は高くなく、県間でのばらつきもみられる。今後の生産性向上のためには、各ほ場の条件に適した排水対策を行うことが重要である。

4麦作付面積の水田での作付割合（令和7年度）

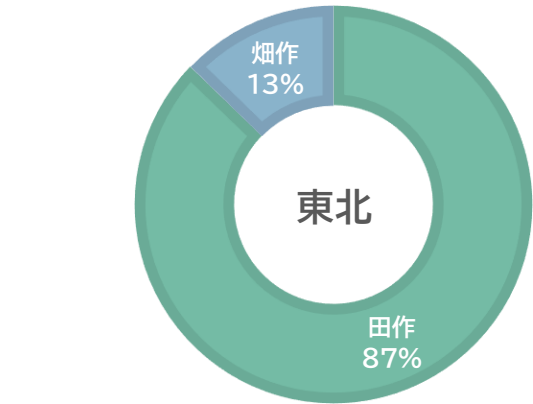
	4麦 作付面積 (ha)	うち 田作面積 (ha)	田作割合
全国	293,660	184,450	63%
都府県	158,400	149,930	95%
東北	8,236	7,181	87%
青森県	807	479	59%
岩手県	3,800	3,344	88%
宮城県	2,645	2,595	98%
秋田県	272	259	95%
山形県	181	120	66%
福島県	531	384	72%

湿害による影響



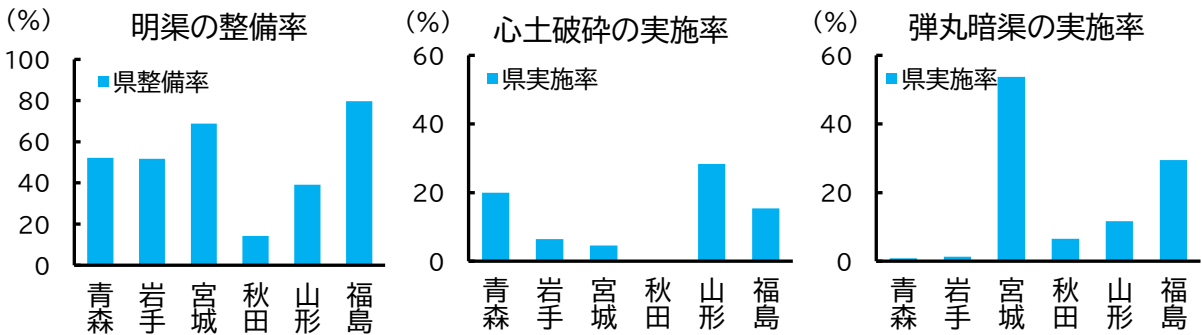
排水対策を実施したほ場(左)と未実施ほ場(右)

資料：診断に基づく小麦・大麦の栽培改善技術導入支援マニュアル（農研機構）



資料：東北農政局生産振興課調べ

水田で作付けされた麦の排水対策の実施状況（令和7年度）

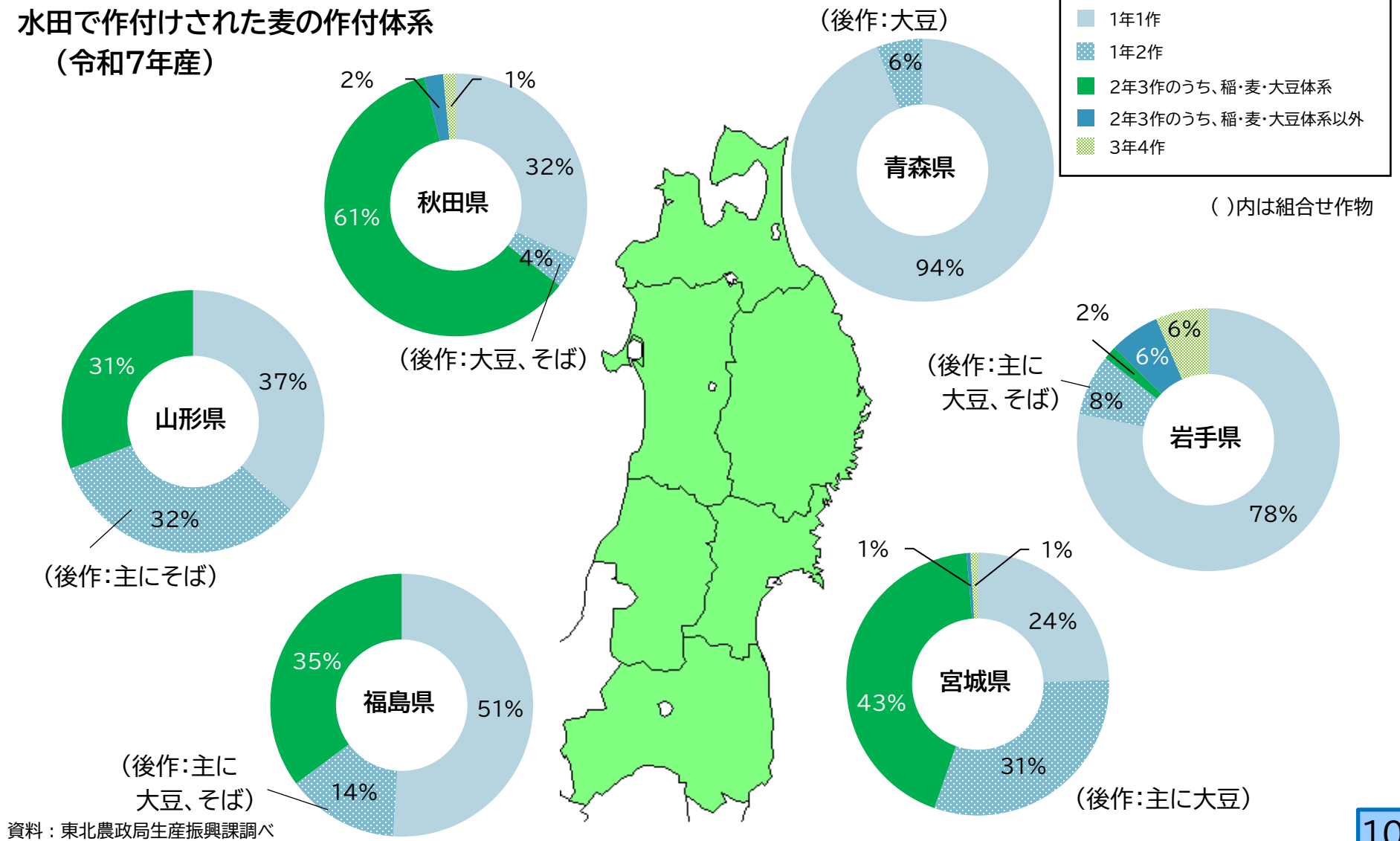


資料：東北農政局生産振興課調べ

注：整備率・実施率は、4麦作付面積のうち水田での作付面積における当該対策の割合

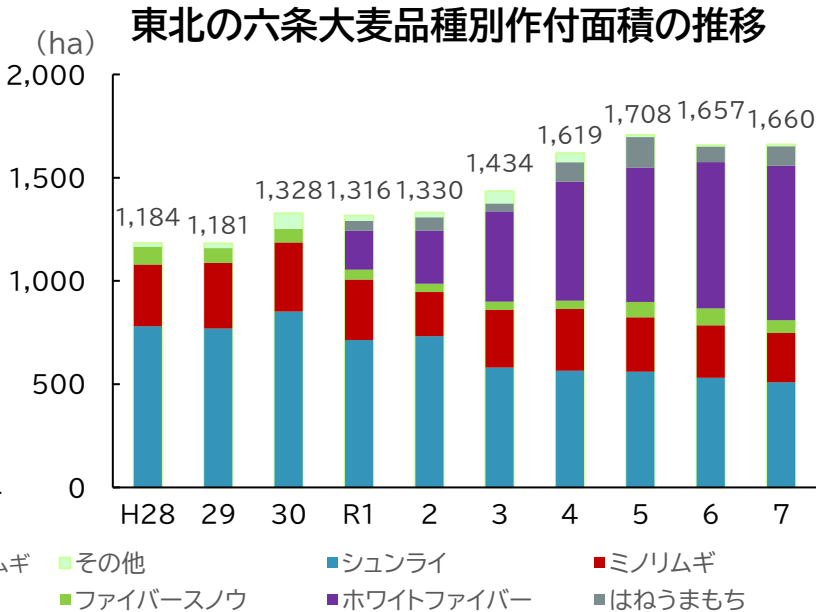
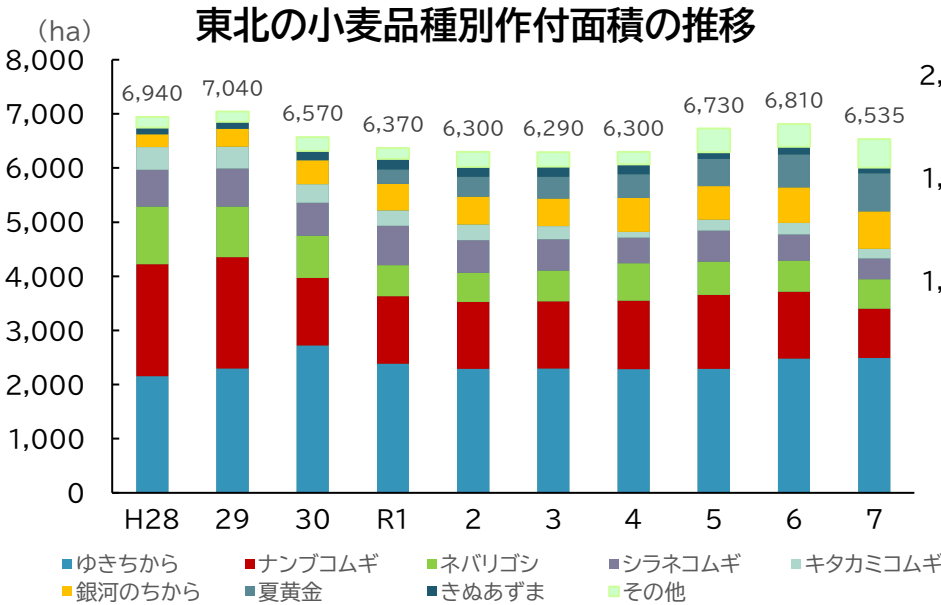
4 東北各県の麦作における作付体系

○ 水田で作付けされた麦の作付体系は、青森県、岩手県及び福島県においては1年1作体系が半数以上を占める。宮城県及び秋田県においては稲・麦・大豆による2年3作体系の導入割合が高く、山形県においてはそばと組み合わせた1年2作体系の導入割合が高い。

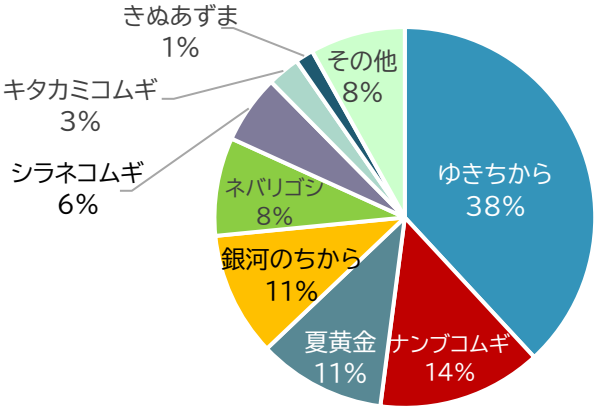


5-1 東北の麦の品種構成

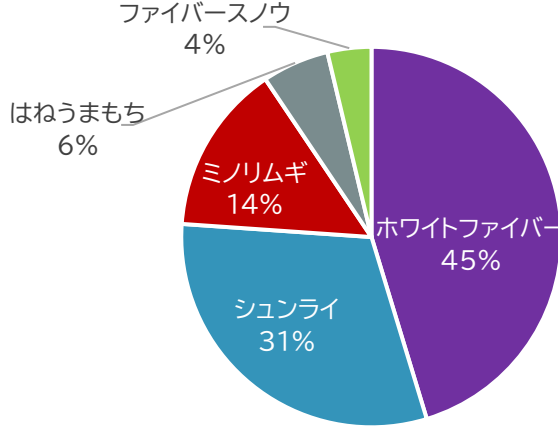
- 東北地域で最も作付けが多い小麦の品種は、「ゆきちから」となっている。「夏黄金」、「銀河のちから」が増加傾向にある一方、「ナンブコムギ」、「ネバリゴシ」等の作付けが減少している。
- 六条大麦については、これまで作付けの多かった品種「シュンライ」、「ミノリムギ」が減少傾向にある一方、近年育成された「ホワイトファイバー」の作付けが増加している。



東北の小麦の品種別作付割合(令和7年産)



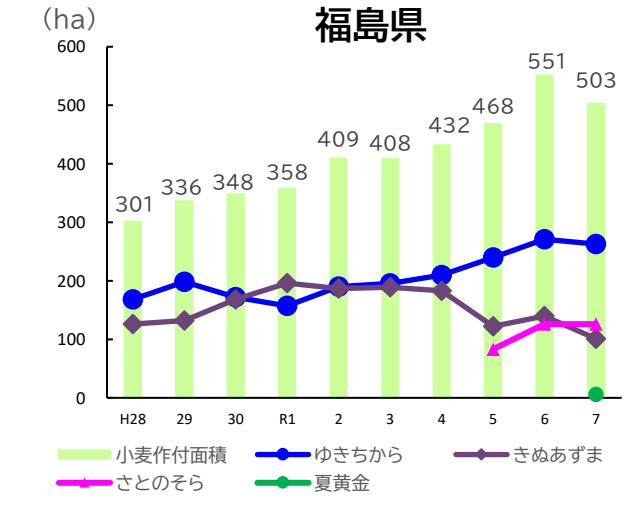
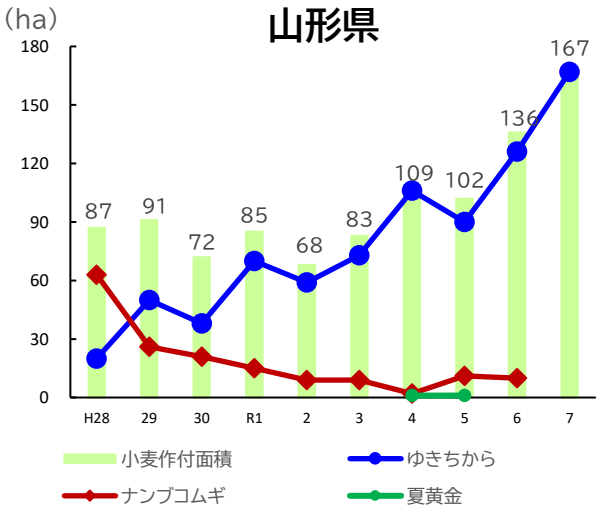
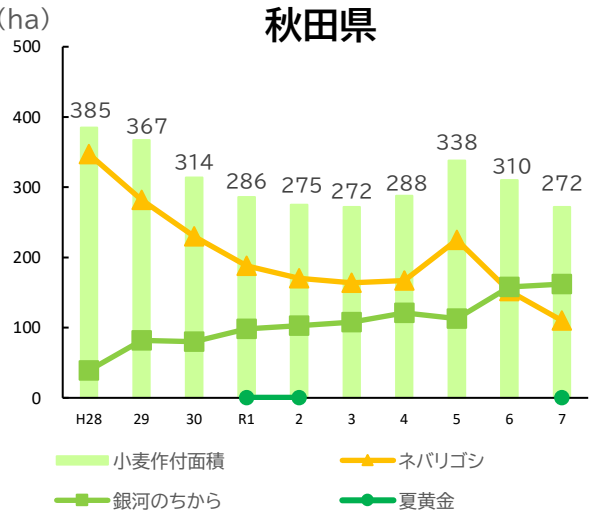
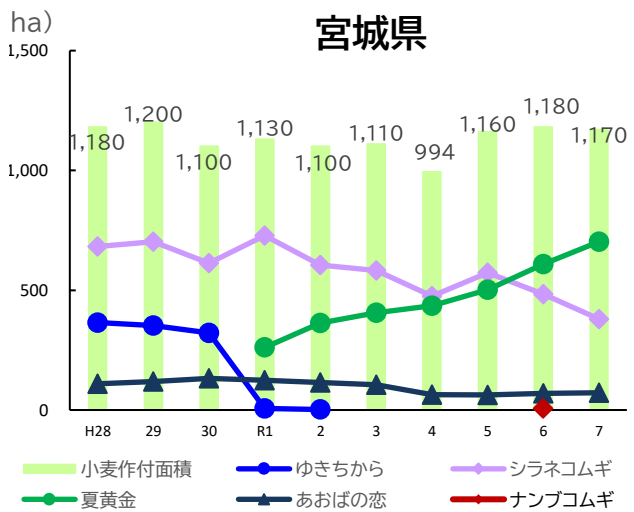
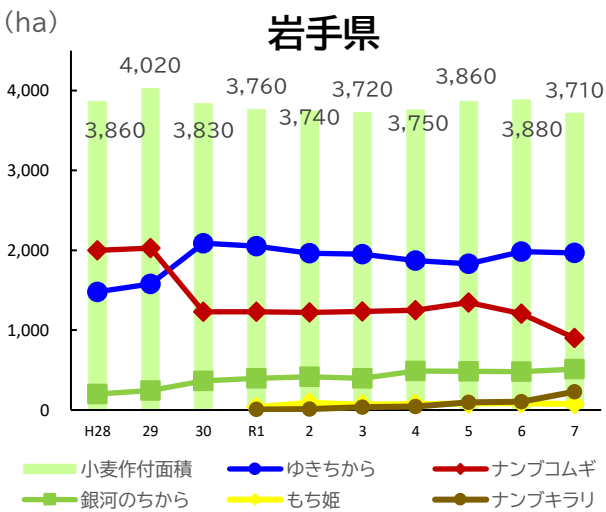
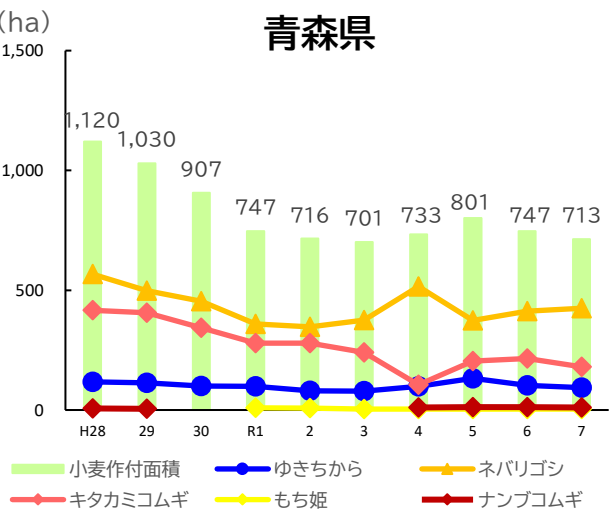
東北の六条大麦の品種別作付割合(令和7年産)



資料：東北農政局生産振興課調べ

5-2 東北各県の主な小麦作付品種の推移

- 東北各県の主要品種は、青森県では「ネバリゴシ」、岩手県、山形県及び福島県では「ゆきちから」、宮城県では「夏黄金」、秋田県では「銀河のちから」である。
- 東北地域では「ゆきちから」が広く作付けられているが、宮城県では令和元年産から「ゆきちから」に代わり「夏黄金」の作付けが開始された。以降、「夏黄金」の作付面積は増加し、令和6年産以降は「シラネコムギ」を上回っている。



資料：東北農政局生産振興課調べ

5-3 東北地域で作付されている主な品種

	品種名	育成年	育成機関	主な特性	作付けのある県 (令和7年産)
小麦	ナンプコムギ	昭和26年	東北農業試験場※	中生、やや長稈、耐寒雪性強	青森県、岩手県
	キタカミコムギ	昭和34年	東北農業試験場※	中晩生、やや長稈、良質多収	青森県
	シラネコムギ	昭和60年	長野県農事試験場	やや早生、強稈	宮城県
	きぬあずま	平成12年	農業研究センター※	穂発芽耐性、縞萎縮病抵抗性、耐倒伏性強、多収、低アミロース	福島県
	ネバリゴシ	平成12年	東北農業試験場※	早生、多収、低アミロース、製めん適性良 耐穂発芽性強	青森県、岩手県、秋田県
	ゆきちから	平成14年	東北農業研究センター※	早生、耐病性、耐寒雪性強、製パン性良	青森県、岩手県、山形県、 福島県
	もち姫	平成18年	東北農業研究センター※	もち性、洋菓子・せんべい等の地域特産 的用途、収量性、製粉性に優れる	青森県、岩手県
	あおばの恋	平成20年	農研機構	早生、縞萎縮病抵抗性、穂発芽しにくく、 めんの粘弾性が優れる	宮城県
	さとのそら	平成20年	群馬県農業技術センター	耐倒伏性強、縞萎縮病抵抗性、穂発芽性 難	福島県
	ゆきはるか	平成23年	東北農業研究センター※	多収、菓子適性良	岩手県
	銀河のちから	平成23年	東北農業研究センター※	耐倒伏性、縞萎縮病抵抗性、穂発芽性難 超強力小麦	岩手県、宮城県、秋田県
	夏黄金	平成29年	東北農業研究センター※	穂発芽性難、縞萎縮病抵抗性、製パン適 性	宮城県、秋田県、福島県
	ナンプキラリ	平成30年	東北農業研究センター※	多収、穂発芽性難、縞萎縮病抵抗性、製 めん適性	岩手県
六条大麦	ミノリムギ	昭和44年	長野県農業試験場	中生、多収、長稈、耐雪性強	宮城県
	シュンライ	平成2年	長野県農事試験場	やや早生、強稈、外観品質良	岩手県、宮城県、山形県、 福島県
	ファイバースノウ	平成12年	長野県農事試験場	中生、耐倒伏性・耐雪性強、精麦白度高	岩手県、宮城県
	ホワイトファイバー	平成28年	長野県農業試験場	中生、もち性、精麦白度高	宮城県
	はねうまもち	平成28年	中央農業研究センター※	中生、もち性、精麦白度高	青森県

資料：「主な特性」は農林水産省「麦の参考統計表」、「作付けのある県(令和7年産)」は東北農政局生産振興課調べ

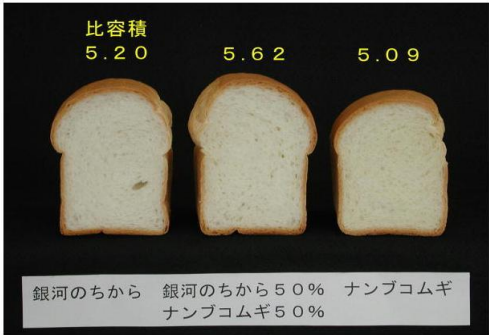
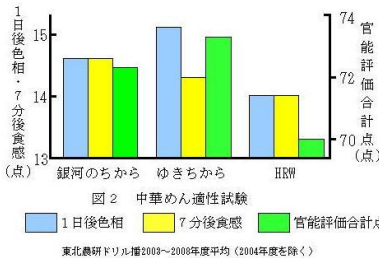
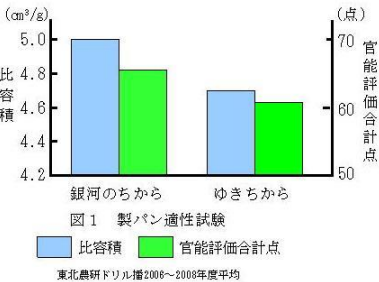
注：育成年は出願公表が行われた年

※現 農研機構

○ 農研機構 東北農業研究センターは、東北地域を栽培適地とする新たな品種として、パン・中華めん用に適した超強力小麦品種「銀河のちから」(平成23年)、製パン適性に優れた小麦品種「夏黄金」(平成29年)を育成した。

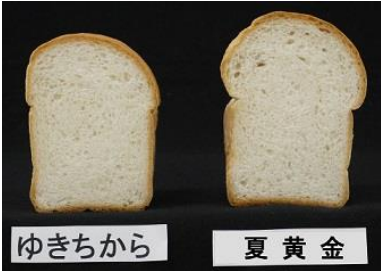
「銀河のちから」

- 「ゆきちから」と比較すると、パンの比容積と官能評価が優れる。また、グルテンが強靱な特性を持つため、「ナンブコムギ」等グルテンの質が弱い品種の粉とブレンドすることで、その製パン適性を高めることができる(参考:図1、写真1)。
- 中華めん適性は「ゆきちから」より色相がやや劣るが、ゆでのび程度(7分後食感)はやや優れる(参考:図2)。
- 「ゆきちから」より成熟期が2日遅く、収量は同程度で、容積重が大きく、外観品質が優れる。
- 「ゆきちから」と比べて、耐寒性と耐雪性は劣るが、耐倒伏性と耐穂発芽性は優れる。縞萎縮病に強く、「ナンブコムギ」より優れる。
- 東北・北陸の平坦地(目安としては根雪期間80日以下)が栽培適地である。



「夏黄金」

- グルテンの性質が準強力小麦の「ゆきちから」と超強力小麦の「銀河のちから」の中間で、単独で使用しても高い製パン適性を示す。ほとんどの種類のパンを製造することができる。(参考:写真2)
- 収穫期は「ゆきちから」とほぼ同じで、草丈はやや低く、収量性は同程度だが、容積重が優れる。
- 「ゆきちから」と比べ、縞萎縮病の耐病性は同程度、穂発芽しにくくなっている。
- 赤かび病に対しては「ゆきちから」より強いが、薬剤防除は必要である。
- 東北・北陸の平坦地(目安としては根雪期間100日以内)が栽培適地である。



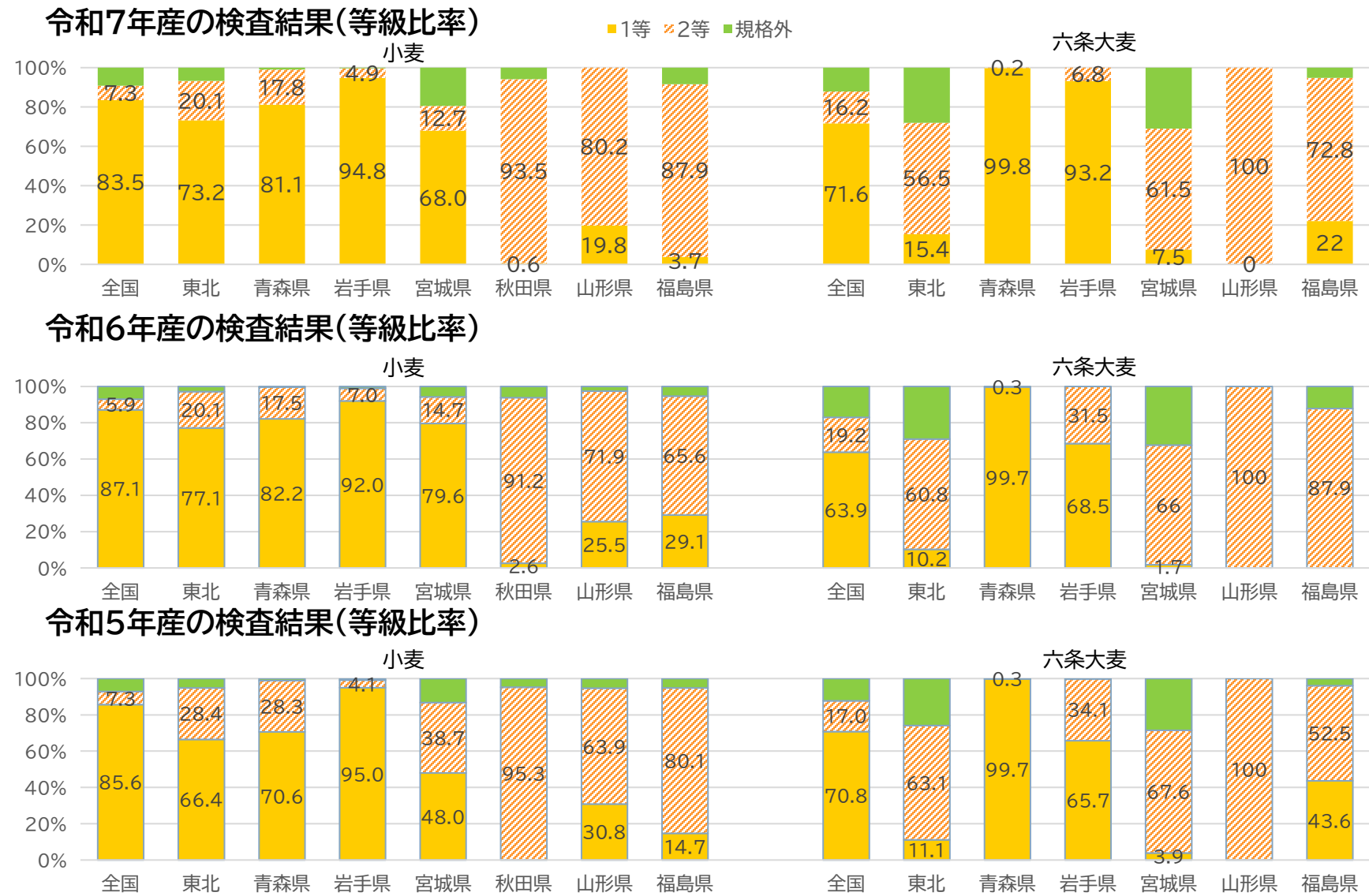
表「夏黄金」の収量性等

品 種 名	出穂期	成熟期	稈長	穂数	子実重	容積重	千粒重
系 統 名	月/日	月/日	cm	本/m	kg/a	g	g
夏黄金	5/18	7/1	89	588	54.8	845	38.3
ゆきちから	5/18	7/2	94	623	55.5	836	39.5
銀河のちから	5/19	7/4	88	537	54.3	855	39.2
ナンブコムギ	5/18	7/1	102	560	41.2	836	43.9

注1:2011年度を除く2008～2015年度の7箇年平均
注2:東北農業研究センター水田ドリル播(生産力検定試験)成績

6 東北各県の麦の農産物検査結果

- 東北地域における小麦及び六条大麦の等級比率は、県ごとにバラツキがみられる。
- 1等比率は、小麦では岩手県が全国平均を上回り安定して高い。



資料：農林水産省「令和7年産麦の農産物検査結果(確定値)、令和6年産麦の農産物検査結果(確定値)、令和5年産麦の農産物検査結果(確定値)」

7 赤かび病防除体制の強化

- 日本では、麦類の生育後期に降雨が多く、気温が高くなることが多いため、赤かび病が発生しやすい。赤かび病被害を受けた麦を摂取したことによる集団食中毒が複数報告されている(昭和30年代)。
- このため、小麦(玄麦)について、食品衛生法(昭和22 年法律第233 号)に基づき、かび毒「デオキシニバレノール」(以下「DON」という。)の基準値(1.0mg/kg)が設定されている。
- 基準値を超える麦が流通すれば、消費者からの信頼を損ない、当該事業者のみならず、国産小麦全体に大きな影響を及ぼす深刻な事態となるため、徹底した対策が必要。

赤かび病への主な対策

<適期防除>

- ・ 必ず最初の防除(※)を行う。
- ・ 気象条件や品種特性、地域のJA等の指導に応じ、追加の防除を行う。
- ・ 防除適期に降雨が続く場合であっても、短い晴れ間を利用をするなどして確実に実施する。

<適期収穫・乾燥>

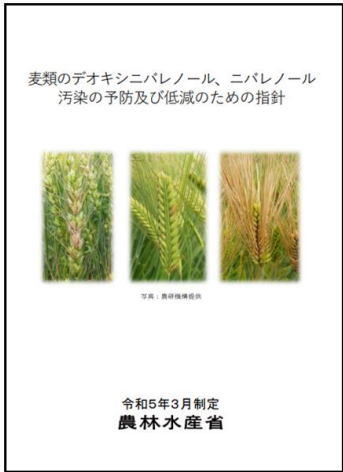
- ・ 刈り遅れにより麦類が降雨に当たること、早刈りや降雨直後の収穫により乾燥時間が増加することは、赤かび病を進展させ、かび毒の産生を助長するため、適期に確実に収穫する。
- ・ 麦類の収穫適期は年により変動することが多く、また、ほ場によっても異なるが、麦粒中の含水率 30%以下が目安となる。
- ・ 農業者は、収穫に当たって、普及指導センターや農業団体等からの情報及び天気予報に注意し、自らもほ場を巡回し、登熟の程度を把握した上で、適期になり次第、速やかに収穫する。
- ・ 地域で収穫作業計画を作成し、機械及び施設の処理能力にあわせた計画的な収穫を行う。
- ・ 収穫後は速やかに乾燥を行い、被害粒が見られた場合は仕分けを徹底する。

<検査の実施>

- ・ 農業者、生産・集出荷団体等においては、エライザ(ELISA)分析キット等により、試し刈りや荷受け時の子実中のDON、ニバレノール(以下「NIV」という。)等のかび毒の含有濃度を確認し、効率的な分別や乾燥調製を行う。
- ・ かび毒の含有濃度の測定結果の信頼性確保のため、測定する者は十分なトレーニングを受けるとともに、年に1回は麦類の DON、NIV 等のかび毒の定量分析の技能試験に参加し、分析精度を確認する。



小麦の健全粒(左)と赤かび病被害粒(右)の例



麦種	(※)最初の防除を行う生育時期
小麦	開花を始めた時期から開花期(1穂につき数花開花をしているものが、全穂数の 40～50 %に達した日)までの間
二条大麦	穂揃い期(全茎の 80～90 %が出穂した日)の 10 日後頃の葯殻抽出期
六条大麦	開花を始めた時期から開花期までの間

農林水産省
「麦類のデオキシニバレノール、ニバレノール汚染の予防及び低減のための指針」
https://www.maff.go.jp/j/syouan/seisaku/risk_analysis/priority/kabidoku/attach/pdf/mugi_kabi_sisin-6.pdf

8 東北地域の麦実需者からの要望

- 国内産麦の人気の高まりにより、近年、需要量が生産量を上回る傾向。東北地域でも国内産麦を積極的に使用したい実需者が必要量を確保できない課題がある。
- 特に、品質の安定化、実需が求める小麦の安定生産等が求められている。
- このため産地においては、①農地の集約・団地化、②単収・品質向上のための技術対策、③実需者が求める品種への転換等により、需要に応じた生産を行っていくことが重要。

実需者からの要望

【品 質】

- ・安定した品質のために、産地によるタンパク質含有率のバラツキをなくし平準化を望む。(気象状況等を勘案した肥培管理をはじめとする徹底した栽培指導を要望)
- ・でんぷん質の変性「低アミロ」傾向となる可能性が高い穂発芽の発生は、加工に多大な影響を及ぼすため、アミロについての改善を望む。(改善方法の検討を要望)

【品種・銘柄】

- ・消費者及び実需者が求める小麦の安定生産を要望。

【数 量】

- ・引き続き単収の向上。
- ・販売予定数量策定時と集荷実績の単収の乖離の縮小。

【流 通】

- ・フレコン化への取組。
- ・防虫・防鼠対策等、衛生管理の徹底。
- ・保管倉庫での温度管理(低温、定温)の取組。

【その他】

- ・異種穀粒(特にソバ等アレルギー物質)等の異物混入防止措置の徹底。
- ・残留農薬・DON検査の徹底。
- ・適期防除の指導の徹底。

もっと詳しく知りたい方は...

R7 麦作共励会

検索

所在地

宮城県
登米市



経営規模

小麦：11.4ha
 水稻：29.0ha
 大豆：11.9ha
 ばれいしょ：1.6ha
 採草地：12.0ha
 肉用牛：約300頭

【R7年産：栽培実績】

- 品種：夏黄金
- 単収：654kg/10a
 (県平均：444kg/10a)
- 1等比率：42.8%
 (県平均：78.6%)
- 品質区分：Aランク

耕うん同時播種 (パワーハロー・グレンドリル)



収量・品質向上に向けた取組

- 連作障害や難防除雑草抑制のため、**水稻→小麦→大豆**や**ばれいしょ→小麦→大豆**等の2年3作体系を実施。
- 播種前には**額縁明渠**や**ハーフソイラ**を施工、融雪後には**浅明渠**を**額縁明渠**につなげ、融雪水のほ場外への排水を促進。
- 追肥について、県の栽培マニュアルで推奨している3回に加え、冬の鳥害からの生育回復に「株なおし追肥」を1回実施。
- 土づくりについて、**自社で製造した堆肥施用**に加え、土壌物理性の改善と地域の方に農業への関心を持ってもらうことを目的に**緑肥ひまわり**を栽培。



緑肥ひまわり

特色ある取組

- **耕うん同時播種**のほか、RTKを活用した**自動操舵**や**営農管理システム**の活用で、所要時間は3.75h/10a（県平均：4.6h/10a）。
- ピザ店・製粉会社と連携し、**実需者向けにほ場見学会**を開催。実需の求める品質の小麦を栽培し、実需と産地の結びつきも拡大。



実需者向けほ場見学会

今後の取組方針

- **小麦面積10%以上拡大**と合わせ、**自動操舵**や**食味・収量センサー付きコンバイン**を導入し、効率・品質を高めていきたい。

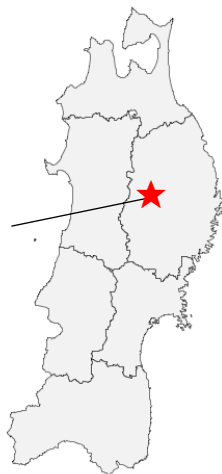
もっと詳しく知りたい方は...

R5 麦作共励会

検索

所在地

岩手県
紫波町



経営規模

小麦：68.9ha

水稻：68.9ha

そば：68.9ha

【R5年産：栽培実績】

➢品種：もち姫

➢単収：284kg/10a
(県平均：207kg/10a)

➢1等比率：100%
(県平均：95%)

➢品質区分：Cランク※

※もち姫のアミロ値は検査機器のフォーリングナンバーで低アミロと判定されるため、Cランクとなる。

収量・品質向上に向けた取組

- 連作を避けるため、ブロックローテーションによる小麦作付けの団地化を図り、**水稻→小麦→そばの2年3作体系**を確立。
- ほ場の特性に合わせて、明渠、サブソイラー、溝切を行い、**ほ場に停滞水を作らない**ようにするとともに、融雪後に排水溝にたまった土砂等の清掃作業も怠らず実施。
- 倒伏や短穂・細穂の発生状況を鑑み、播種量は5～6kg/10a、追肥は葉色診断に基づき2回実施。
- 衛星リモートセンシング「天晴れ」の画像を参考に、**収穫期の判定を行い、刈り取るほ場の順番を決定**。

特色ある取組

- アップカットロータリーで**耕起同時播種**し、労働時間を短縮。
- 消費者を対象にしたほ場での刈取体験や、「もち姫」で試作したうどんやすいとんの試食会、調理体験を開催。



親子でうどん作り体験会

今後の取組方針

- 製粉企業と意思疎通を図りながら、作付面積を徐々に伸ばしつつ、実需にも消費者にも信頼される生産拠点を目指す。

追肥量を決める葉色測定の様子



9-3 取組事例(麦稈と堆肥の交換による耕畜連携)(青森県十和田市:豊川氏)

所在地



青森県
十和田市

経営規模

小麦 : 3.66ha
水稻 : 3.5ha
牧草 : 1.0ha
野菜(ながいも、にんにく、ごぼう、さつまいも等) 1.8ha
繁殖牛 : 5頭



豊川 総一氏

子牛の敷料に用いている麦稈



麦

稈と堆肥の交換による耕畜連携のきっかけ

- 麦の作付けを始めた4～5年くらい前に、畜産会社に話したことが始まり。北海道では麦稈を敷料として使っているケースが多いことを話したら、それから麦稈を買い取ってくれるようになった。

取

組状況、収量に対する影響

- 麦を刈り取った後のほ場に、地域の畜産農家が大きな機械で入って、残っている麦稈をロールにして持ち帰ってくれる。麦稈は、2,000円/10a(作業料込み)で買い取ってもらっている。
- 刈り取った麦稈はしばらくほ場に放置しているが、麦ほ場は乾きやすいことに加え、麦稈自体がストロー状になっていて晴れ間があればあっという間に乾くため、ほ場に放置でも問題ない。
- 麦稈をすき込まないことで地力低下が懸念されるが、畜産農家から譲り受けた堆肥を3～4t/10a施用しており、収量と品質を確保できている(R6産収量: 571kg/10a、経営所得安定対策に係る品質評価ランク: 全量Aランク)。堆肥利用により、化学肥料使用量も60%以上削減している。
- 麦稈は、チョッパーで粉碎したうえで子牛の敷料として活用している。

今

後の取組方針

- 単収向上を目指すとともに、麦稈を用いた耕畜連携に継続して取り組んでいきたい。

参考1 麦の種類・用途

- 我が国では、小麦、二条大麦、六条大麦、はだか麦の4麦を生産している。
- 食用麦については、小麦で約8割、大麦で約4割、はだか麦で約2割を輸入に依存している。

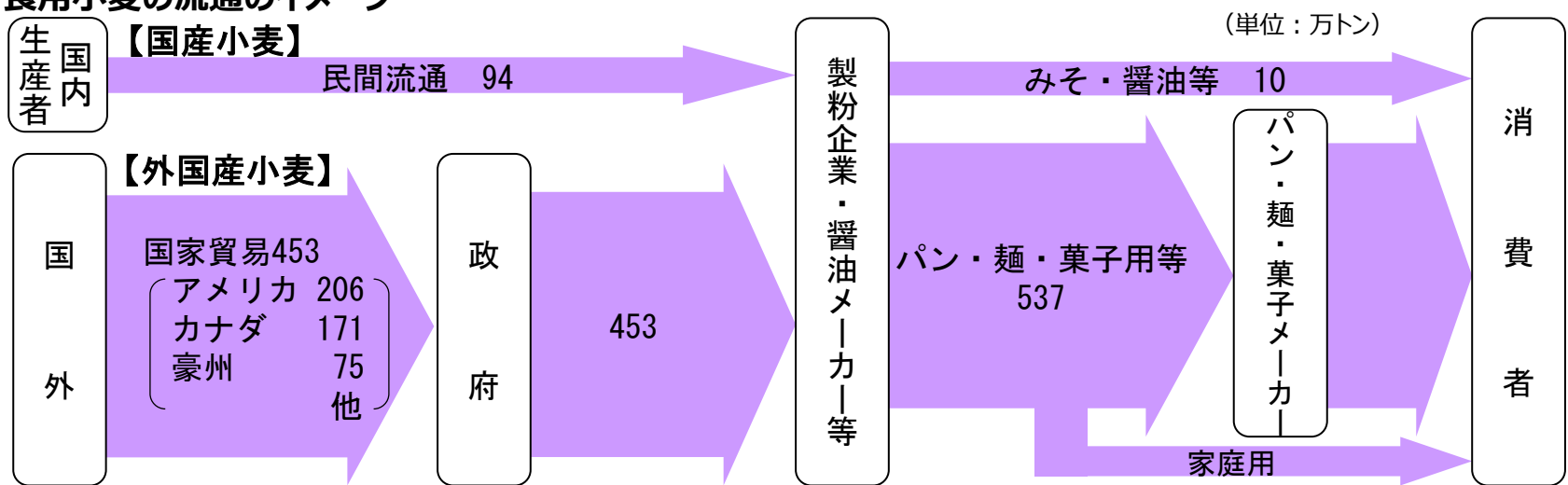
麦種	用途	国内生産量 (R 7 年産)	輸入量 (R 6 年度)
小麦 - 小麦には、グルテニンとグリアジンと呼ばれるたんぱく質が含まれており、これらが水を含むことでグルテンが形成される。このグルテンは、粘り・弾力があるためパンや麺に適している。 - 用途により求められるたんぱく含有量が異なる。  小麦は小穂が交互になる。 うどん パン 中華麺 菓子 103.1万トン 北海道(65%) 福岡県(6%) 佐賀県(4%) 448.4万トン			
大麦 二条大麦 - 大麦は二条と六条に分けられる。さらに、皮がはがれやすいものを「はだか麦」と呼んでいる。  6列のうちの2列に実がなる。 大粒大麦とも呼ばれる。 【上から穂を見た図】 2列だけ実がなる 実がならない 六条大麦 - 大麦は精麦して押麦にするほか、ビールの醸造原料にも用いられている。  6列（条）のすべてに実がなる。 小粒大麦とも呼ばれる。 【上から穂を見た図】 6列すべてに実がなる はだか麦 - グルテンを含まない。  二条大麦、六条大麦と外見はほぼ同じ。 現在生産されているはだか麦は六条の品種が多い。 ビール 焼酎 15.3万トン 佐賀県（29%） 栃木県（20%） 福岡県（18%） 8.1万トン ※ビール用の麦芽輸入量は含まない			
押麦 麦茶 5.9万トン 福井県（28%） 富山県（17%） 滋賀県（11%） 5.1万トン			
麦みそ 1.7万トン 愛媛県（35%） 大分県（17%） 香川県（14%） 0.4万トン			

注1：国内生産量は作物統計(令和7年産)
注2：輸入量は食糧用麦政府輸入量(決算ベース)

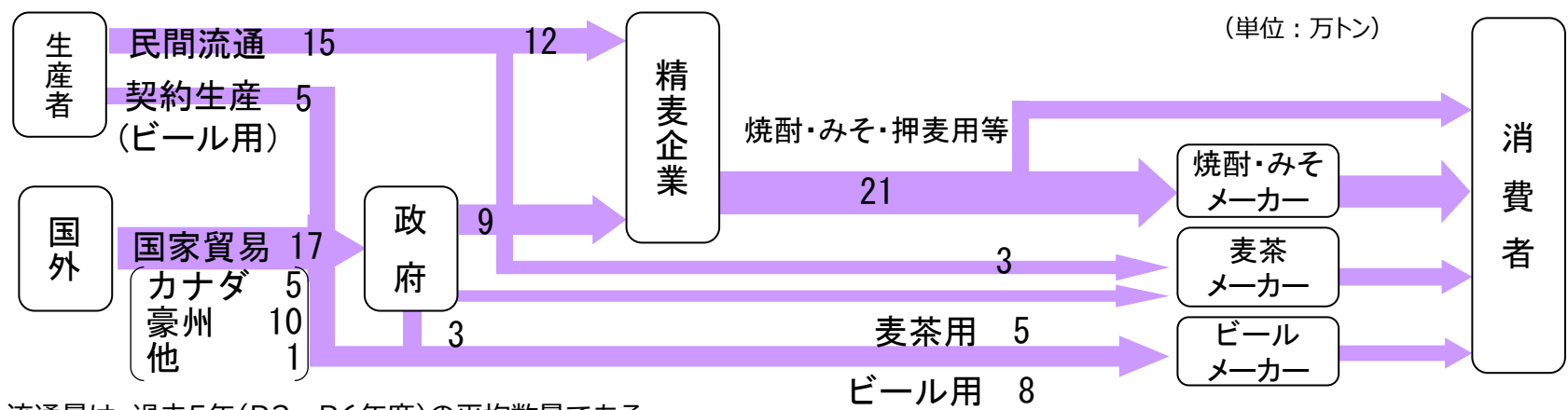
参考2 麦の流通の概要

- 国内需要量の約2割を占める国産小麦は、民間流通により取引されており、残り約8割を占める外国産小麦については、国家貿易により一元的に輸入されている。主に製粉企業が製粉して小麦粉にし、その小麦粉を原料として二次加工メーカーがパン・麺・菓子等を製造している。
- 大麦・はだか麦については、精麦して焼酎、みそ等の発酵用、押麦(麦飯)用等として流通している。

○ 食用小麦の流通のイメージ



○ 食用大麦及びはだか麦の流通のイメージ



注：流通量は、過去5年(R2～R6年度)の平均数量である。
資料：農林水産省「麦の生産をめぐる事情」

参考3 食料・農業・農村基本計画における麦のKPI

- 令和7年に食料・農業・農村基本計画を策定し、令和12年度を目標年度に、食料自給率や生産コストの低減等に係る目標を設定。
- 小麦については109万トン(令和5年度実績)から137万トンに、大麦・はだか麦は23万トン(令和5年度実績)から26万トンに生産量を拡大する等、目標達成に係るKPIを設定している。

令和12年度における麦のKPI

品目	KPI		基準年 (R5)	→	目標年 (R12)	克服すべき課題と構ずべき施策
小麦	作付面積 (万ha)		23	→	26	〈生産〉 ○ 安定的な数量・品質での供給を確保 ○ 地域計画に基づく農地の集積・集約化による規模拡大 ○ 大区画化や汎用化・畑地化等の基盤整備、スマート農業技術等を活用した省力的な栽培体系による適期作業の推進、多収品種の開発・導入等による、生産性の向上 ○ 実需のニーズを踏まえた品種転換 ○ 北海道においては、畑地における輪作体系の中で、特に耐病性品種等を開発・導入 ○ 都府県においては、特に農地の集約化やブロックローテーションの導入、畑地化等による生産性の向上、大規模化に向けた受託組織等の育成 ○ 実需者が求める品質水準が満たされるよう、病害虫抵抗性を備え、高品質で安定生産が見込める多収品種の開発や、降雨量の増加や短時間豪雨の頻発等に対応する排水対策等の営農技術の導入を推進 〈流通〉 ○ 国産麦の安定供給に向け、ストックセンターの整備や調整保管に対し、引き続き一定の支援を行う等、生産の拡大に伴う課題に対応した、物流機能の確保を図る 〈消費〉 ○ 国産麦の機能性を活かした新商品の開発やPR などへの支援を通じ、新たな用途への活用等による付加価値やブランド価値の醸成を図り、国産への切替えや更なる利用拡大を促進
	単収 (kg/10a)	田	397	→	489	
		畑	569	→	605	
		全国	472	→	537	
	生産量 (万t)		109	→	137	
	国産切替量 (万t)		0	→	27.5	
	保管数量 (万t)		2.9	→	9.0	
	生産費 (円/60kg)	田	10,400	→	9,300	
		畑	7,700	→	6,200	
大麦・ はだか麦	作付面積 (万ha)		6.4	→	6.8	
	単収 (kg/10a)		363	→	382	
	生産量 (万t)		23	→	26	